



Title	企業はなぜ芸術を求めるのか？
Author(s)	菅家, 正瑞
Citation	経営と経済, vol.89(1), pp.81-122; 2009
Issue Date	2009-06
URL	http://hdl.handle.net/10069/23395
Right	

This document is downloaded at: 2019-02-16T23:53:16Z

企業はなぜ芸術を求めるのか？

菅 家 正 瑞

Abstract

There are many kinds of relationships between modern corporations and the arts. Modern corporations need the arts to win in competitive market economy and modern citizen societies. The arts are necessary for corporations to make good works and sustain itself eternally. We, however, do not know exactly how these relationships are related .

Thus, we must explore relationships between modern corporations and the arts. This paper's objective is to answer a question, " why do corporations need the arts? "

Keywords: modern corporation, the arts, corporate mécénat, corporate philanthropy .

1 . 序

われわれは今、企業と芸術との関連について検討するという課題を追求している⁽¹⁾。両者は様々な側面で、色々な相互依存関係を持っている。例えば、企業は、その製品のデザインについて芸術家の助力を必要とするだろうし、芸術は企業による支援によって新たな作品を生み出し、われわれの生活を精神的に豊かにするであろう。文化・芸術に対する企業支援、いわゆる「企業メセナ」(corporate mécénat)は、単なる篤志家や篤志企業による文化・芸術への支援と理解されてはならず、両者にはそれぞれの必要性が、すなわち合理的理由がその背景に横たわっているのである⁽²⁾。

本稿の課題は、以上の問題意識を基に、企業と芸術の関連について本格的な研究を行っているイールズ(R. Eells)の所論⁽³⁾の検討を介して、両者の関連性について考察すると同時に、何故に企業は芸術を求めるのか、という問題を解明することにある。

注

- (1) 企業と芸術との関連については、次の文献を参照されたい。

拙稿「市民化管理と企業メセナ」『経営と経済』第88巻第2号 平成20年9月 長崎大学
経済学会, 123頁以下。

拙稿「企業は芸術とどのような関係にあるのか?」『経営と経済』第88巻第3号 平成20
年12月, 271頁以下。

拙稿「企業の社会的責任と芸術」『経営と経済』第88巻第4号 平成21年3月, 35頁以下。

- (2) 企業メセナの企業的必要性については、以下の文献を参照されたい。

拙著『環境管理の成立』千倉書房 平成8年, 第1章 環境管理の成立, 1頁以下。

拙稿「市民化管理と企業メセナ」, 上掲論文。

- (3) 本稿で検討するイールズの所論は、次の文献で述べられているものである。なお、本稿における本文への参照と引用は、本文中に()で示すこととする。

Richard Eells, "The Corporation and The Arts," The Macmillan Company New
York 1967.

2. 現代企業の出現と芸術

イールズによれば、企業と芸術との関連が決定的に強まり深まったのは、資本主義が発展しいわゆる「現代企業」(modern corporation)⁽¹⁾が成立してからであり、そのような歴史と発展の中で企業と芸術との関連を捉えることが必要であると主張する。そこでわれわれは⁽²⁾、まず、彼の歴史的企業観を概観することとする。

イールズは、アメリカにおいて文化的ルネッサンスが最新の傾向に反映しているだけでなく、「長期的な意味を持つ何かが沸き立っており(*op.cit.*,

p.145.)」, それは, 芸術の制度的構造において基本的変化が潜行していると同時に, 企業が社会的制度へと進化していることである, と主張する。そして, これらの企業の制度的変化と芸術の変化が遭遇し交わるならば, それは, アメリカ文化に関する新たな一頁を生み出すと同時に, 両者が分離された研究では誰も予見できないものである, と断言する。(cf. , *op.cit.* , pp. 145-146.)

そこで, イールズは両者の交差とその影響について考察するのであるが, われわれはまず, 企業の発展の背景にある資本主義経済体制の変化について彼の主張を概観しよう。

1. 二つの資本主義

(1) 大衆企業資本主義(public corporate capitalism)

イールズによれば, この範疇の目印は, 株主, 経営者の間の「所有と支配の分離」(separation of ownership and control)である。この範疇の企業は巨大であり, 意思決定には重い社会的責任が付随し, 収益性は事業成果の唯一の基準ではない。企業 - 芸術関連では, 社会的責任のみならず, より高い文化的目標を目指す社会に適合するよう社会的制度の側面により広く注意を払う。この範疇の企業は次のように三つの副次型に区別でき, それらは芸術にそれぞれ独自の態度を持っている。それらは, 偉大な10億\$企業, 数億から20億\$の大企業, サービス型の中・大企業, である。(cf. , *op.cit.* , p.158.)

イールズはそれらの企業について, 以下のように説明する。

巨大な数10億\$の企業は国の制度になった。それは多数の株主で特徴づけられる巨大寡占の企業で, 取締役は保守的で, 業務は官僚的であり, 反独占主義の対象になりやすく, 雇用安定の圧力がかかり, 用心深く行動し, 成長率は国のそれとより密着している。

この10年間に私的領域の外で行動している巨大企業で, 従来の産業構造

の外部における企業を代表している。それらは、攻撃的であると特徴付けられるが、政府の規制対象にはまだなっておらず、その数は成長率より速く増大している。

サービス型企業が多く、歴史は古いが、新たな産業を代表し、それらの領域では新しい制度であり、それぞれの市場では中心的な存在であることが多い。

これらの三つの型は我々の大衆企業資本主義を構成しており、企業 - 芸術関連における緊張が期待され、社会的責任に関心があるので芸術を支援するように見えるが、株主が何を考えているかが問題であり、また専門経営者が発展している、とイールズは特徴づけ、さらに詳細に説明している。(cf., *op.cit.*, pp.159-160.)

(2) 私的資本主義(private capitalism)

イールズは、ここでは三つの副次型を区別する。伝統的企業、ベンチャー、山猫企業(山師企業)、がそれである。これらは古い資本主義に適合し、大衆株主、専門経営者、取締役は持たず、所有と支配の分離はない。社会的責任への関心と新たな領域への企業活動に対する株主との緊張は無く、これらの企業には私的資本主義の典型が見られる。これらは混じり合っており、その境界はぼんやりしており、株主は投機に向かうか、大衆企業資本主義の企業へと向かう。(cf., *op.cit.*, pp.161-162.)

2. 資本主義と企業

イールズは、上述のようにその特徴から区別された資本主義における企業について、以下のように整理している。

(1) 大衆的資本主義と現代企業

「今日の企業制度は、伝統的な法的で経済的な伝説の企業と比較されるよ

うに、記録すべき進化を成し遂げた(*op.cit.* , p.146.)」。しかし、左翼からしばしば批判されるのは、イールズによれば、我々の資本家社会の構造は概略的に二つの一般的な範疇に入る企業の型を持っているからである。第一の範疇は、「大衆的企業資本主義」あるいは「民主的資本主義」(democratic capitalism)として特徴づけられる企業である。第二の範疇は、アダム・スミスの時代を思い起こさせ、我々の国でも沢山残っている事業単位である。企業 - 芸術関連の性質は、それらの範疇が移動するとともに変化するから、それらの関連を一般化することはできないので、それぞれに応じて考察しなければならない、と述べている。(cf. , *op.cit.* , pp.157-158.)

イールズが言うまでもなく、企業に向けられる批判は、企業は極大利潤への突撃によってのみ動機づけられるという仮説である。経営者は大衆から情け深いイメージを得ようと努力するが、必ずしも成功するとは限らない。また、企業は、左翼のみならず右翼からも批判される。企業は、所有者のために利益を獲得する事業に厳しく邁進すべきである、と言うのがそれである。しかし、「ビジネス界の偉大な企業指導者達によって適用された政策は、古典的経済学と古典的社会主義の両者が受け入れた教義を物ともせず飛ぶのがしばしばである(*op.cit.* , p.147.)」。すなわち、今日の企業は、イールズの言う現在の制度的地位へと発達したのである。「企業は確かに『人工人間』であったが、それは同様に、西洋社会の生態的条件への知的人間の自然の反応であった(*op.cit.* , p.147.)」。人間の共同的努力の制度としての企業は、全てが自然であり、共通の目的によって生じる生命力を授けられた。人間の制度としての企業がその政策に人間的特性を必然的に反映して以来、長期的観点を取らなければならない人々によってそうであるように作られ、企業政策の「心のかもった」質にはほとんど驚かされないのである。だから、我々は社会的責任企業の出現に驚かない。大事なのは、「企業は召使いであり、人の主人ではない(*op.cit.* , p.147.)。」ということである。排他的に「経済人」の召使いであるという誤りにこだわるのは、発展能力ある制度としてそ

れを運命づけたかもしれない。(cf. , *op.cit.* , p.147.)

イールズは、このように制度としての偉大な現代企業の存在を強調する。しかし、中心的で大多数の企業は、未だに保守的な型である、という事実を記録しなければならないことを彼は認める。これらの企業では、偉大な制度的企業に影響されて、高度な社会的責任が企業政策を統制していることは事実であるが、大企業は複雑な補助的目標を持つとしても依然として利益志向的なのである。(cf. , *op.cit.* , p.148.)

(2) 伝統的企業の発展

イールズは、ここで伝統的企業の成立と発展について、過去を振り返って歴史的な考察を行っている。その中で、企業人格の問題に特別な興味を示している。まず、ヨーロッパにおける法的展開について考察した後、アメリカにおける発展について述べている。中世の法律家教会と修道院の関係、古代ローマ法、中世のイギリスにおける共同的自律性の概念、自治都市と憲章、などの考察を通して、法人組織の出現とそれらの合法化について述べ、それらが法的な実体として成長し、現代企業が高い自律性と自己統制体となったことが述べられる。次いで、アメリカにおける歴史的発展を展望し、アメリカの制度的法律と企業の自律性に対する侵害者に関する歴史は、とても魅力的な章である、と評価している。アメリカ法において彼が強調しているのは、「法律によって企業部門を不当に取り扱う事から解放すること(*op.cit.* , p.152.)」である。(cf. , *op.cit.* , pp.148-152.)

企業の権利は憲法によって保障されており、「それらは決して疑いのない憲法の原則である(*op.cit.* , p.152.)」。企業の保護条項は、「企業の自律性の保護者として、企業を超える私的権利の巨大な複合体と同様に、それらはとても価値あるものである(*op.cit.* , p.152.)」。

伝統的企業と新しい社会的責任を持つ企業は、このような法的基礎の上でしっかりと根付いている。重要なのは財産権の受容である。連邦憲法と全て

の州憲法は、民主主義の法的・経営的機関に対して、財産権に対する関心を示している。南北戦争前、裁判所は企業権利の防御者になったが、他方では、連邦と州は大衆の利害のために経済的に介入する法的権力を強化した。この傾向は、ニューデール時代の中心の一つであった。しかし、これらは企業の自律性の低下を意味せず、伝統的企業の崩壊を意味しなかった。むしろ、投資家を政府から保護する重要性を強調したのである。この立法は公共政策の新しい次元を導入したが、結局、「企業法はどんな基本的方法でも変えさせられなかった(p.154.)」。したがって、経済の国家主義化はなかったのである⁽³⁾。(cf. , *op.cit.* , pp.152-154.)

(3) 現代企業の出現

結局、イールズが強調するのは、変化したのは企業自身の管理の構想である、ということである。企業統治の構想は事業指導者自身からもたれされた。この新しい企業統治は、企業 - 芸術関連を考察する場合には特に興味がある。この構想に作用して、州の立法でも興味ある傾向が見られた。それは、企業法における「新しい見方」(new look)である。同様の方向へ動く企業権力の法的解釈の傾向もあった。それらの全体的傾向として、企業の自律性に関する教義への新たな強化が与えられ、一方では公的所有の企業には伝統的構想が残されたままであった。イールズによれば一見矛盾するこの前進は、社会構造派の学生には奇妙ではない。一方では、企業は合理的で競争的な「経済」人の利潤探求単位として狭く取り扱われ、他方では、「政治」人との関係で権力の体系としての現代企業の居場所は見つからず不安定であった。(cf. , *op.cit.* , pp.154-156.)

イールズが述べるには、企業とは複雑な社会的制度である。古典的で伝統的な企業は、経済人仮説の世界に属し、株主の財産利害に支配され、管理者は利潤極大化に単一的志向的に奉仕し、それは経済学と企業神話における伝統主義者の理想的目標であり、そうであった、と彼は批判する。現実の事業

世界では、この純粋な理想を希薄化する理由は沢山ある。真っ先に挙げられるのは、大組織における経営的機能の性質である。「現代企業は社会に存在する制度であり、社会の縦系と横系の統合された部分であり、その素晴らしい組織的で資本能力への数え切れない要求の標的としてここに立っており、あらゆる種類の社会的機能のための奉仕のために草案を書かされ、中でも最も重要なのは、人類の継続している冒険に市民としてそれら自身が深く含まれる人々によって営まれていることである。これらの条件の下では、経済人と伝統的に考えられた企業の見事な分離は不可能である(*op.cit.* , p.156.)」。(cf. , *op.cit.* , pp.155-156.)

しかし、「新資本主義」(new capitalism)の典型である制度的大企業の陰には、まだ沢山の伝統的企業が存在する。だが、豊かなシステムの多様性と弾力性は、強さの源泉である。もう一つの源泉は、いわゆる資本家システムの実践的方法である。伝統的企業は現代企業とともに繁栄する。社会的に考える経営者の見える手と、古典的教義の創造的な自己統制的経済は、協働する余地がある、と彼は考えている。(cf. , *op.cit.* , pp.156-157.)

企業芸術の相互作用では、何らかの区別をすることが重要である。イールズが言うには、我々が企業について語る時は、高度な多彩な企業世界について話している。我々の中心的な関心は企業と芸術との関連にあるが、芸術家と企業経営者の特殊な相互関係を示す際には、彼等自身の企業の正確な性質へ反映することを中止することが必要である。芸術と事業は両者とも、理想の冒険を含んでいる冒険の種である。しかし、冒険の性質は小企業や山猫企業とは違う。建築家の冒険は、制度化された要求に妨げられる。企業は展望として、企業 - 芸術関連にアプローチする事業と芸術の両方で政策者を助けなければならない。(cf. , *op.cit.* , p.157.)

3 . 企業 - 芸術関連に対する意味

今日の企業管理は株主の意志に関係なく独自の道を歩む、としばしば言わ

れている。「しかし」、とイールズは言う。彼は、投資家と管理は企業について同じ関心があるというのが事実である、と断言する。異なるのは、上述の企業の6つの型の違いは、異なった外部関係の政策を経営者に要求する、ということである。それらの相違から、これらの企業の芸術への関連に何らかの影響が現れ、それらの関連は歴史的展望において最良に見ることができる、と述べている。(cf. , *op.cit.* , p.161-162.)

10億\$の企業では、企業構想は高い成熟の段階に達した、と彼は認識する。それらの企業は様々な能力を獲得し、経済における適当な力と立場を達成したとき資本市場に接近し、新たな企業を企てることができる。株券は主要な企業に対して、一つの制度を表している。これらの制度は、管理スタッフを持つ有利な役員によって支えられている。彼等は、企業を維持し、発展を保持し、新たな価値を創造し、古い価値を進歩させ、最適能率のために研究する。このように現代企業はほとんど古い企業には入っておらず、強さと継続性を持っている。(cf. , *op.cit.* , pp.162-163.)

イールズによれば、成熟した巨大企業は資本拡大から利益は得ない。これらの企業の株主は、利益獲得と成長を目指す一般的な企業の株主から区別されなければならない。これらの企業は、大衆的企業資本主義の範疇に属し、株主は、19世紀型の私的資本主義である企業、ベンチャー、山猫企業とは異なる評価ができる。偉大な企業制度はレースに勝ったが、私的資本主義の企業は努力しもがいている。冒険的企業は「文化的上昇の贅沢」(the luxury of cultural uplift)を与えることができないので、芸術と企業の関係が唯一の理由のように見える。これらの企業のリスクと危険に身をさらすことはそれぞれ異なるが、これらに企業 - 芸術関連にアプローチすることを期待してはならない、と彼は注意を促す。(cf. , *op.cit.* , pp.163-164.)

私的資本主義の事業単位は、企業の文化的活動に反する傾向がある過去の競争的システムである。芸術を避けて企業の継続性を考えなければならないとすれば、企業 - 芸術の相互作用に関する考慮からほとんど得られるものは

ない。しかし、新しい種類の企業の登場は、この相互作用の新しい地平線を開く。これらの偉大な制度は新たな道に挑戦する。企業の「啓発された自己利益」(enlightened self-interest)⁽⁴⁾という言葉の能力を、その専門スタッフは探求できる。新しい知識を有効に使い、知識を大きく蓄える能力で、成長と生存の文化的生態に関し、企業は冷静に新しい価値を探求する。(cf., *op. cit.*, pp.163-164.)

例外的に、私的資本主義の企業が芸術と文化の発展に貢献し、制度的企業は最も保守的で新しい資本主義の標準を開く機会を逃すように見えるが、新しい価値に到達した企業のほとんどは、基礎を確立し新たな分野へ進出する一般的で偉大な制度的企業と見られるべきである、とイールズは主張する。私的領域への経済の前進は過去のほんの10年間で、それは次第に実現しており、特に大衆的企業資本主義として述べられた中間の領域に前進しているのが何よりも重要である。「偉大な制度的企業の経営指導者は、全体としての政治経済の新しい類型の言葉で未来に直面しなければならない(*op. cit.*, p. 165.)」。アメリカ国家産業委員会の最近の調査は、明らかな傾向の証拠を提供する。指導的企業は責任として大衆事業を考えている。それらは企業フィランソピー(corporate philanthropy)と関係してそのような活動を含んでいる。国家の問題を解決することが彼等の事業ではなく、単に物を生産し販売することである、と述べたのはほんの少数の企業であった。これらの傾向は、社会的責任という長く論争された問題の再考を促すことになる。(cf., *op. cit.*, pp.165-166.)

以上が、資本主義と企業の成立と発展に関するイールズの見解である。ここでわれわれがイールズの所論において注目すべきことは、アメリカの資本主義の発展の中心は制度化された大企業であること、発展した大衆的資本主義において企業は本来の業務と並んで社会的責任を要請されていること、社会的責任を含む企業活動は不可欠の要素として芸術を必要としていること、である。われわれの関心は企業と芸術との関連であるから、次に、

芸術について企業活動と関連させながらイールズの見解を検討しよう。

注

- (1) われわれは、産業革命以降の機械的生産を中心とする企業を「近代的企業」と呼び、それらの中でも生産の機械化が高度化し、規模が増大し寡占化した大企業を「現代企業」と呼ぶこととする。
- (2) 本稿では混乱を避けるために、「われわれ」とは著者を指し、「我々」とはイールズを指すこととする。
- (3) 伝統的企業の発展過程に関するイールズの見解について、詳しくは以下を参照のこと。
Eells, *op. cit.*, pp. 146-154.
- (4) 「啓発された自己利益」あるいは「開明的な自己利益」については、次を参照のこと。
田淵節也（監修）『コーポレート・シチズンシップ』講談社 1990年、48頁。

3．芸術と企業の共通性

言うまでもなく、芸術は、経済体制と並んで政治体制と密接に関連している。イールズが述べるように、政治が芸術に対しどのように関与するかという問題は芸術にとって決定的であり、特に、芸術にとっての命とも言うべき「創造性と革新の自由」(freedom of creativity and innovation)がどのように取り扱われるか、を決定するのが政治だからである。当然、イールズもこの問題を詳しく検討しているので、彼の見解を見てみよう。

1．政治と芸術

(1) 政治体制と自由

イールズは企業と芸術との関連の考察において、両者の重要な共通性を取り出す。それは自由である。「創造し革新する自由は、芸術が繁栄するための必要条件である(*op. cit.*, p. 46.)」。この自由は、企業と芸術の相互作用では両者にとって基本的問題である、と強調する。そして、自由社会と対象

的な「権威主義者」(authoritarian)と「全体主義者」(totalitarian)がもたらす「専制政治」(despotism)における芸術の悲惨さを指摘する。専制政治の経験は、我々に新しい教訓を教え、古い議会制政府を思い出させた、とイールズは述べる。同時に、「多元社会」(plural society)の重要性を指摘する。多元的社会が意味するのは、分裂と同一性により基礎づけられていない、目的の国民的な一体化である。そこでは「連合」(association)の自由が基本的であり、この自由は沢山の連合に応用される。ビジネスマンにとっては、これは協働的に活動する自由であり、経済の広大な協働構造を成長させたのである。多元主義(pluralism)は、連合の立憲的自由の注目すべき社会的価値の一つであり、労働にも資本にも応用される。それは、芸術から経済まであらゆるものを生みだし、高い生産的なシステムである、と評価し、権威主義者と全体主義者を立憲主義(constitutionalism)と関連させて批判する。(cf., *op.cit.*, pp.46-48.)

立憲の工夫は「手続法」(adjective law)である。企業者と芸術家はここに共通の目的があるが、この手続法の要求は単純ではないことを忘れてはならないことを、イールズは忠告する。彼によれば、企業と芸術家の相互作用を語る際に、手続的の局面は最高の重要性を持つことを強調する。これは、我々の社会をより高いレベルの文化に高度化するという共通の利害を語る時に、関連する。(cf., *op.cit.*, p.49.)

(2) 束縛された自由

「自由と解放は、科目から科目へ、国から国へ、政治から非政治へと動くときに変化する可能性がある(*op.cit.*, p.50.)」。共産主義と全体主義の両者では、芸術と企業を政治的エリートの権威主義的命令に屈服させることが目的である。そこでは、文化的で政治的エリートにとって、企業に対する自由と芸術に対する自由は、馬鹿げた「中産階級」の偏見であり、解放のリトマス試験紙である、とイールズは解する。しかし、革新と創造性は、共産主

義と全体主義が消滅しても、脅かされないことはない。彼によれば、芸術と企業の場合では、問題は創造性と革新のために対抗するか否かである。これらの条件は、権力の構造と過程の両者に対して必ず非権威主義者であり、創造と革新に必要な条件は、民主的社會の生命と平行している。しかし、立憲的体制でも、制限は政府にすなわち政治的エリートの下に置かれている。ナチス・ドイツでは、科学と芸術における創造的活動の可能性は、厳しく減じられた。共産主義においては、芸術は政治から独立して栄えることはできず、したがって、この側面では社会主義社會は資本主義より計り知れず優れている、とイールズは皮肉ることを忘れない⁽¹⁾。(cf. , *op.cit.* , pp.48-54.)

2. アメリカにおける芸術活動

(1) 多様な社会と芸術

それでは自由国家を標榜する、アメリカにおける芸術と国家権力の状況はどのようなであろうか。イールズによれば、我が国においても、もちろん必要な規制があるが、「全体主義の統制と比較して、我々の公的な芸術のそれでは異なる度合いと種類があるだけである(*op.cit.* , pp.57-58.)」。USでは、「公的政府は公的な利害が上手に確立された理由と、立憲の手続きを通して受け入れられた公的政策義務を除いて、私的部門を侵害してはならない(*op.cit.* , p.58.)」という仮説がある。それにもかかわらず、イールズによれば、我々の多様な社会では様々な要求や抗議があり、押し寄せる利害は、この動きを可能にする公的政策と私的的努力が一緒になって、何が良い芸術なのかを示す曲がり角に潜んでいるおせっかいな代理人を刺激する。芸術の国民的基金の設立についての討論の間に問題が生じ、創造的自由の基本問題は残り、この問題は、企業経営者にとって必要な不可侵な自由の問題と密接に関係しているのである。(cf. , *op.cit.* , pp.58-59.)

イールズは、それは芸術に対する企業の支援、特に彼等の創造性と自由に対する支援であると主張する。「芸術家に対する創造的自由という『必要性』

(the imperative)はそのような支援(企業支援 - 管家)を要求する(*op.cit.* , p. 59.)』。三段論法的に言えば次のように説明される。芸術の創造性は、芸術家に対する私的部門の保護に依存している。企業が芸術的自律性に力を入れなければ、政府による支援から生まれる芸術に対する政府統制の危険がある。したがって、上述の命題が証明される。また、既述のように、芸術への企業支援は、科学者、技術者、企業者の革新的自由における企業の利害に密接に関連している。(cf. , *op.cit.* , p.59.)

さらに、イールズは次のように主張する。アメリカ社会がより高い文化へ進もうとする我々の努力は、政府によって為されてはならない。私的部門を存続させ、繁栄する芸術的私的部門を助けなければならない。企業は、掛け金(money at stake)を沢山持っているから、財務的に最大の助力者でなければならない、と。これが専門的観点から見るとどのようになるか、という問題が残っている。しかし、私的努力が政府の文化プロジェクトにブレーキをかけるケースを動気づける。(cf. , *op.cit.* , pp.59-60.)

彼は、政治と芸術の関連についてさらに具体的に検討する。彼は、ケネディ大統領の文化芸術政策を評価する。ケネディ大統領は、1963年に経営者レベルで芸術に関する大統領諮問委員会を設置した。委員会は5つの点について検討を求められた。ケネディの死後、ジョンソン大統領はケネディの政策を受け継ぎ、以後文化・芸術に対する政府の支援は強く進められたのである⁽²⁾。その一つが「パトロン制」である。(cf. , *op.cit.* , p.60ff.)

(2) 芸術のパトロン制

芸術の政府パトロン制

「政府パトロン制」(government patronage)とは芸術に関する連邦政府による支援であるが、これについて、大衆は必ずしも好意的には受けとらなかった。芸術における自由な創造性という条件は確保されるのか、政府は文化的発展を本当に助けるのか、芸術への政府の控えめな支援に対し

てさえも防御しなければならないのか、といった問題が論じられた。しかし、連邦政府は芸術は重要でありそれに義務があるという原則によって、公的に前進の一步が踏み出された。これを得るために対してさえ厳しい戦いがあったのである。識者は言った、「芸術の政府パトロン制は多分、これらの条件下では『飾り物』以上のものでしかないないだろう(*op.cit.*, p.70.)」,と。自由な創造性の条件として、私的パトロン制が繰り返し主張され、同時に連邦政府は文化に対して広い利害を持っている。「基本的問題は、まさに憲法や他の根拠によって芸術へどんな連邦的助成、あるいは芸術の促進が認められるか、である(*op.cit.*, p.71.)」。公的基金は芸術的自由を害する、という証拠はなかった。通常考えられる政府の援助は、芸術家と制度への財務的許可である。同時に重要なのは、減税や免税といった租税措置である。同じく、連邦政府は何もしないことによって、芸術家に特別な負担を担っている。例えば著作権の問題がそうである。芸術的企業を保護する連邦税と著作権の力を使用することは、企業 - 芸術関連の根元を得ようとする企業経営者にとって特別な利害を持っている。(cf., *op.cit.*, pp.68-74.)

私的パトロン制

芸術の保護・発展については「私的なパトロン制」(privet patronage), すなわち企業支援で対応できる、と考える人たちがまだいる。しかし、企業支援はどのように達成し得たであろうか、とイールズは問う。全体の資源は急速に成長する要求に多分対応できないであろう。私的資源は使い切れない泉ではないという現実と直面し、この国では芸術スポンサー制度の混合的特徴を受け入れなければならないであろう。(cf., *op.cit.*, p.78.)

そうならば、創造性と革新は、次第に抑圧されるのであろうか。創造し革新する自由は、芸術の財務的支援と経済的生産システムは、そのような混合にそんなに依存しないであろう、とイールズは推測する。その理由として彼が指摘するのは、高い優先的目標である創造性と革新を維持する我々の市

民社会の意志の強さ、この目標に到達するために選ばれた方法と手段の効率性、である。芸術は企業管理とは相容れない領域であるとは言えないし、芸術は明らかにビジネス活動に密接に類似している。それは、革新を生産する人間の心と個性の質に依存しているからである。そこで、イールズの研究は個人の問題にまで及ぶのである。(cf. , *op.cit.* , p.78.)

3. 創造的自由の条件

(1) 芸術と企業の自由

イールズは、アメリカにおいて芸術は適切な条件を与えられて栄えるだろう、と予測する。新たな技術の有利さを得るのは疑いもなく芸術家の自由であり、この自由は企業者の革新的活動を含めて、革新一般に要求される自由と異ならない。企業政策に責任ある人々が、芸術の成長の条件に注意する必要があるのは、自由の条件が共通することを要求するからである。同じ理由から、芸術的創造性が必要な領域で人々が自由という目的を追求する際に、企業指導者が共通の原因を作ることは望ましいことである、と彼は述べる。(cf. , *op.cit.* , p.74.)

自由の性質は捕まえどころがない主題であり、不自由の豊富な経験があるとしても、それが奪われて初めて我々はそれを最も正しく理解する。創造的個人に対する抑制の最小化は、西側の伝統における利権主義の基本的要求である。権力の抑制には創造者と革新者が立ち上がるべきであり、我々の社会を豊かにするならば必要なことである。しかし、もっと何かが必要である、とイールズは思考する。政府権力の創造的利用は必要であるが、これは芸術と産業にも適用される。国家権力の行使は、全体としては市場の成長と繁栄に必要な条件であった。問題は、芸術と創造的自由に関する意義である。国家政府は、創造的人間を養育するために少なくとも第一ギアを入れた。芸術を育てる権力を持つ憲法を我々は改正してはならない、とイールズは強く主張する。権力の保持者の創造的人々に背を向けない抑制と、創造的能力を勇

気づけ自己効率化する機会を開く政府の賢明な権力行使に加え、創造性と革新を通して進歩する芸術にとって、さらに次のような必要な条件がある、と彼は議論を展開する。潜在的革新者と芸術の作品の創造者が実際に存在すること、真に自由な社会の環境において、彼等自身の能力、「非抑制」と機会が真実である能力が与えられた一部の人々の自覚、がそれである。(cf. , *op.cit.* , pp.74-76.)

潜在的革新者や無名の創造的人間が現れることに成功するのか、彼等の能力を究極に発展させる方法を知っているのか、芸術的で革新的な自由に対する条件はこれなのである。彼等が開かれている自分の才能と能力、開かれていない潜在的な創造的人々にとって、問題はそれを自覚し認めることである。選択の幅は広く、幅をより広く実現する可能性が増大していることは、自由社会の戦略の一部であり、それは教育システムに向かう。教育において、芸術の価値へ注意を払わない国は、新たな出発に出会うように強く刺激されなければならないであろう。(cf. , *op.cit.* , pp.77-78.)

企業経営者の大きな関心と実践的に急ぐ問題は、芸術の有利さに対し強力な政府の財務的援助と体系的政策なしに、芸術の高い標準が達成できるかどうかである。私的な努力はなされるだろうが、政府の参加無しに我々は芸術に対してなすべきことを知らない。問題は、新しい自由と抑圧、適正な統制と統制された権力なのである。(cf. , *op.cit.* , p.78.)

(2) 企業 - 芸術関連と自由

イールズが強く主張するのは、「自由」の確保である。自由は、公的部門は勿論のこと、私的部門においても確保されなければならないのである。この自由は政治と密接に関連するので、彼は幾つかの政治体制の検討によってその自由の内容を検討している。その結果、彼が認めるのは「民主的立憲制」(democratic constitutionarism)である。全体主義も独裁主義も単なる立憲制も、必要な自由概念を認めない。民主主義が浸透し「市民社会」(civilized

society)が形成された段階において、自由が確保される、と考えるのがイールズなのである。

その意味において、アメリカ社会は十分な要件を備えている、と彼は考えている。もちろん政府は無条件の自由を認めているわけではないし、芸術活動に対する基本的構想と政策によって自由を拘束している。しかしその拘束と統制は適正に行使され、必要な抑制が行われている、と彼は評価する。したがって、アメリカにおいては自由、特に芸術活動と企業活動に絶対的に必要な「創造と革新の自由」が保証されている、と考えるのである。(cf., *op. cit.*, p.68ff.)

ところで、企業活動と芸術活動にとって上述の自由確保と保証が重要であるとしても、企業 - 芸術関連についてはどんな意味があるのだろうか。自由はそれらの活動にとって不可欠であるとしても、両者の関連を強く主張することはできないであろう。自由と両者の関連を明白に明らかにするためには、より深い検討が必要であると考えられる。両者の発展にとって、この検討は不可欠である。われわれは、さらにイールズの主張を検討し、企業 - 芸術関連の考察を深めなければならないであろう。

注

- (1) イールズは、芸術と政治体制との関係を、「専制制」、「立憲制」、「民主制」、「共産制」、「全体制」などと関連付けながら論じている。詳しくは、*op. cit.*, p.46以下を参照されたい。
- (2) ケネディ大統領とジョンソン大統領および連邦政府の文化・芸術政策について、詳しくは *op. cit.*, p.60以下を参照されたい。

4. 企業目的と芸術

1. 芸術と知識

イールズによれば、芸術は、事業の地平線を拡げることに貢献できるが、

これは表面的なことで、真実は、知識とアイデアのコミュニケーションを探求するために、芸術と企業に共通する目的の言明を発展させる厳しい努力が必要なのである。(cf. , *op.cit.* , p.80.)

それでは、芸術と企業にはどのような共通目的があるのであろうか。

(1) 知識の獲得と企業

イールズは、経営者が、科学の発展やコンピュータと並んで、知識の探求の小径(path)として芸術の価値を評価するかどうかについてはまだ疑わしい、と慎重に考える。新しい知識の探求は、前進する事業の表明である。知識の新しいフロンテアの拡大は、偉大な企業の特徴である。それ故、今や、知識を持った芸術は、それを探求したことのない人々によって追求されている、と彼は観察する。(cf. , *op.cit.* , p.81.)

芸術と知識の結びつきは、直接的であるとは限らない。古代ギリシャの哲学までさかのぼって、美の古典的理論により、善、真実、美の間の直接的結びつきを見ることはできるが、今日の新古典主義はこれらの理想あるいは普遍性を論破しようとしている。現代的な考えは、芸術と道徳は美しさと醜さ、善と悪に関する規範の評価と表明を含むとしても、同じく知識を探求する「科学」は普遍性の非評価的、非規範的説明を意味する。美学(esthetics)と倫理が形而上学の現代版として並び立つのは、異なる知識を持つ科学であるからだ、と一般的に仮定される。これらは、知ることの手段としての議論を始める場合に注意しなければならないから、十分にその存在が認められる。(cf. , *op.cit.* , pp.81-82.)

ところで、企業と芸術に関して事実認識について欠陥がある、とイールズは主張する。しかし、「芸術は、現代企業においては知識の小径として、政策者のために重要な意義があると考える(*op.cit.* , p.82.)」。これは最も重要なことである。なぜならば、偉大な企業の生存と成長は、利用可能なあらゆる源泉から知識が継続的に流れ込むことに依存し、芸術の分野は価値ある

知識のまだ認められていない源泉の一つだからである、とイールズは解する。この欠陥とそこから生まれる反感は、芸術家にも企業者にも見られる。それ故、もし芸術と科学と産業が同盟し共通目的追求の提案がなされたら、大きな疑いが起きるかもしれない。イールズは、実は潜在的にそのような同盟があり、これは問題を議論する共通目的のために、芸術と企業という二つの大きな制度に対する現在の傾向を検討する目的を持つ、と事の重要性を認識している。(cf. , *op.cit.* , pp.82-83.)

(2) 科学と芸術

科学も同じ目的を持っている、とイールズは考える。夢世界が芸術の世界であるならば、反対目的が作られなければならない、と彼は言う。自分の夢を美的形式で表す芸術家にとって、夢が科学に対する抵抗部分であるならば、両者は類似している。賢明な人は、科学的信憑性を問題とせず、あるいは芸術家の表現を誤解しない。

我々が認められない職業に芸術家がついたならば、それは今日では異邦人として非難される危険と、新ギルド主義に後退する傾向が存在する。科学と芸術という二分法は、芸術家を非現実的な夢世界に落とし込み、「正確な」知識が必要ならば、自分自身を科学者と呼ぶあらゆる人にドアは広く開けられるだろう。ギルド・カードの切り直しと、入会規則の基本的修正は、正確な科学の不正確性を認め、芸術家の有効な評価を意味する。芸術家の急進主義と改革主義に対して、必ずしも目立って尊敬できいつも自然が選ぶとは限らないことを忘れてはならない、とイールズは忠告する。(cf. , *op.cit.* , p. 83.)

(3) 人間と芸術

イールズによれば、我々にとって必要なのは、全体として人間を見ることを助け、人の感情と熱情に対して真実を貫くために、芸術家が客観的な管理

者として我々を助けるという真実なのである。したがって、人の性質を、より真実に理解する方向を目指す自由社会には、芸術家が必要である。例えば、演劇家は社会的シーンではとても重要である。演劇家が大衆に訴えるならば、彼等が打ち出す和音は、演劇家と共に問題があると賛同するから、多数の人々が共鳴するだろう。(cf. , *op.cit.* , p.84.)

倫理的な問題を述べる自由は最も重要な自由の一つである。しかし、解決は、多くの人々によって力強く問題が述べられるまで不可能である。芸術は強く要求する倫理目的を持つ。しかし、疑問符が付く人間条件について述べるためには、何かが、演劇芸術を使う社会価値に対して述べられなければならない。演劇家の仕事は、「問題」を演じるよりもより効果的に自由社会の目的に貢献するであろう。なぜなら、彼等は人間条件を純粋に述べることより、想像を刺激し、社会関係のより均衡が取れた見解をもたらすからである、とイールズは解するのである。(cf. , *op.cit.* , p.84.)

(4) 真実の追究と「理解の方法」(instrument of understanding)

ケネディ大統領は次のように述べている。芸術は「争いの武器ではなく理解の手段として、最も深遠な意味で政治的でありうる(*op.cit.* , p.85.)」, と。これは、最も広く深い意味で、理解することのキーワードである。芸術は政治的のみならず市民的にも必要である。「広い市民 - 教育の意味で、芸術は神の知識と真実の知識の両者のために必要である(*op.cit.* , p.85.)」。今、我々は科学的意味で真実の追究と芸術の役割を見ているが、そこには困難性と反抗が存在する。困難性は、科学と芸術の間に壁を作る傾向から生ずる。知識への小径とコミュニケーションの手段としての芸術、という考えに反抗する輩は、芸術家だけではないのである。(cf. , *op.cit.* , p.85.)

イールズは次のように断言する。科学的真実の理解の門として、芸術の必要性には論争の余地はない。芸術は、知識の冒険の統合的部分である。論理的な分析が我々の失敗に対する直感的判断を提供する。それは、我々が逃がす

だろう意味の理解力である。極めて簡単であるが科学的言葉では簡単に述べられない、感情の複雑性を解く鍵である。理解の方法の用具として、芸術に対するケネディ大統領の指示を拡大できる。拡大は、より重い企業 - 芸術関連を探求する人々を刺激する。企業と芸術の相互作用は強く繰り返されなければならないが、まだ汲み尽くされていない。両者の関係の本質は、芸術家と企業者の共通目的を探求することによって、より密接に接近し物を超越した真実が明かにされることで、理解の用具としての芸術が正当化される。方法がない芸術のこの指示は、それを副次的役割に引き下げる。このように、イールズは企業に必要な真実と知識について、芸術はそのために大きな役割を演じる事を述べるのである。(cf. , *op.cit.* , pp.85-86.)

(5) ホワイトヘッドの見解

ここで、イールズはホワイトヘッド(A.N.Whitehead)の見解⁽¹⁾によりながら、理解の方法について述べている。芸術は、「美的経験の冒険」(adventures of esthetic experience) (ホワイトヘッド)を提供することで理解に貢献する。科学と技術の時代は、知的分析に大きな厳格さを要求する。そして、科学的訓練は「さまよいの必要性」(necessity of wandering)を見失いがちである、とホワイトヘッドは述べる。なぜ「さまよい」が必要なのか？これは「思考の冒険」(adventures of thought)を意味する。思考の冒険は一般的に、思考、感情、美的経験の冒険と統合していた。物的なさまよいは重要であるが、もっと偉大なのは精神的冒険の力である。ホワイトヘッドは「人間の理解力」によって通常は不毛である抽象化への道を進むのを警告した。現代世界には、「完全な事実の具体的な深い思考」から離婚した「知者の独身生活」がある、と彼は述べる。我々の時代には、抽象化の世界を超えて経験するための厳格な思考を全く与えられない危険がある、と言う。残りの生活は表面的扱いを受け、美的経験はこの困難性の外にある不可欠な道であった。(cf. , *op.cit.* , pp.86-87.)

彼に対する批判は、「美的理解の習慣」は豪華で優雅な生活のためだけではなく、「個性の深さを増大させる」という目的を持つべきであったことに向けられる。芸術は生き生きとした価値を楽しむもので、娯楽以上のものを提供し、知的アプローチだけでは与えられない真実への小径を提供する。芸術を通して、人は瞬間的で直感的な理解を達成する。美的成長は極めて狭く限定された抽象化からの解放を意味し、生き生きとした無数の変形が開く。しかし、芸術は多くのものに関連させられていることを、ホワイトヘッドは強調する。企業と社会におけるその役割の研究における理解的アプローチを予見し、社会を価値の変形としての有機体と見た。イールズは、そのような有機体を完全に理解する習慣を訓練したいのだ。(cf., *op.cit.*, pp.86-87.)

過去の世紀では美的経験は、盲目の目を持った最高の人にとって重要であると見なされ、今日の繁栄している産業では芸術は軽薄であると見なされている、とホワイトヘッドは主張したが、イールズは今やそれは真実ではない、と批判する。しかし、我々は技術と知的市民化の一方性を克服する何かを行わなければならない。「芸術の正しい理解」は簡単ではない。芸術家のように創造的人間は「生活の感覚的部分」に気づかなければならない。特に、創造的科学家にとっては教育と訓練における芸術の役割は特に重要なのである。(cf., *op.cit.*, pp.88-89.)

(6) 芸術と直感的知識

イールズはさらに続けて言う。芸術の目的は、物事の外面的表現ではなく、それらの内面的意味である、とアリストテレス(Aristotle)は言明した。何らかの知覚にとって、他の方法では伝えられない芸術家的表現があり、他の方法では知ったり理解したりできない芸術家的形態に真実の具体化がある、と考えられる。これらの問題については様々な人々が言及している。マリテイン(J. Maritain)⁽²⁾の見解は、我々に芸術家と企業者の共通の場所があることを教える。芸術家と現代企業は沢山の点で遭遇する。共通の場所には、ビジ

ネスの世界で非論理的過程を捨て去ろうとしても、あの薄暗い所に非論理的で批判的な理由が横たわっている、と疑われる。行動は芸術の基本であるから、科学が企業フィランソロピーで優先的に取り扱われたいというのは少し矛盾している。企業者のリスク受容と意思決定は科学者と教育者の合理性から離れているので、お互いの生活方法を理解することは困難である。しかし、芸術家にとっては、ビジネスマンが上手に理解できる活発な生活方法がある。(cf. , *op.cit.* , pp.89-91.)

イールズが述べるには、「感覚の神秘的方法」(mystical way of feeling)という方法を通してのみ、利用できる真実の要素が存在する。なぜ、芸術家は内部的な知覚の全体の範囲を取るべきではないのか、という理由に、なぜ我々はこの範囲をカバーすることを相談する理由がないのが付け加えられる。芸術には観察の用心深さが存在する。それは、真実の発見よりも意味の理解に専念された努力である。(cf. , *op.cit.* , p.91.)

それでは、芸術家はどんな真実を発見するのか？芸術家は科学者が把握し得ない何らかの真実を発見し我々に明らかにするが、我々はその所に「客観性」を得ることができるであろうか？刺激的な特殊な感覚の経験はあらゆる美的経験の出発点であるが、芸術家が見るのは対象それ自体ではなく、それらに潜んでいる陰の現実性である。芸術は、正常な視角外にある現実性を見ることを妨げるので、我々は対象あるいは現実性の感覚を持たないのである。(cf. , *op.cit.* , p.91.)

現実性への窓である芸術は、真実の小径としての科学とは異なる。上の見解は、美の形態あるいは美の理想を予想する一つの考えである。我々が美しいと言うとき、我々は美の出現を見るか、あるいは感覚的記述あるいは科学的説明を超えた普遍的真実を聴いているのである。芸術は抽象そのものの一種であり、物質やイベントに潜んでいる美の探求と表現である。科学者はコスト以内でしか研究しないのに対して、芸術家はそれらを理解するためにより近づく。(cf. , *op.cit.* , p.92.)

芸術家の特殊で極端な見解に遭遇するが、これらの特殊な見解は時々疎んじられるので、この芸術家が知覚する真実は誰にも知られないであろう。社会学的で精神分析的な理論は、美学に影響を与えたのは疑いない。影響の証拠は沢山の作品で明らかである。我々を深く感動させる芸術家の力は、これらの見えない幻想を見える姿にする。そのような熟練を芸術家は練習しなければならない。(cf. , *op.cit.* , pp.93-94.)

芸術は、人類が達成したあらゆる表現の最も確かな様式として認められなければならない、市民化のまさに夜明けから広められた一つである。芸術は、普遍性について何かを、人間について何かを、芸術家自身について何かを、我々に述べようとする。知識の様式として、芸術の世界は哲学の世界と科学の世界として価値ある知識の体系なのである。(cf. , *op.cit.* , pp.92-93.)

(7) クリスの直感論

イールズによれば、芸術は人を理解する小径として、知ることの道である。これをテーマとした文献は、精神分析的洞察を特に参考にして増大している、と述べている。高度に特殊化された領域の検討がなされていないとしても、芸術と企業の相互作用の重要性を提示することは充分に言わなければならない。

それでは彼はどのような検討をしているのであろうか。

彼によれば、芸術の現在の再評価に対するフロイト主義者(Freudian)や精神分析的思考の影響は深遠であった。芸術に対するこのアプローチはクリス(E. Kris)⁽³⁾によって確かめられ彼の主張を中心としてこの問題を検討している。芸術は、この面において広く探求されていない知識を持った領域を提供し、人間の性質に関する貴重な情報の宝庫なのである。フロイト(S. Freud)自身も芸術に対して、特に直感について発言しているし、それに対してクリスもコメントしている。偉大な芸術家は何かを持っており、その何かは彼の抑圧への弾力性と直感的洞察であり、それらは現代ビジネスが求め

る沢山の創造的人間に必要なのである。芸術家の問題は「厳格さ」によって条件付けられない。企業や巨大な組織の意思決定に必要な種類の創造性の興味深い鍵が、そこに横たわっているのである。クリスの見解では美的創造と再現で中心的役割を演じる心の質である「美的曖昧さ」は、厳格なアカデミニズムにしかない。それが芸術家にとっては必要なのである。(cf. , *op.cit.* , pp.95-94.)

芸術的で創造的生産を制限する「厳格性」の多様な種類とレベルは、社会学者にとってとても興味ある問題である。この厳格性は変化するが、企業においても従業員の創造性に影響されて意味が変わる。この点に関して、企業の収益性という興味ある問題が現れる。創造性は、どんな他の要因よりもその変化によって直接的に影響されるのではなからうか。

また、クリスによれば、芸術の説明力の展望は現在の条件で変化するという仮説を提示するが、この仮説は産業的生産性に有用であり、特により創造的で非論理的な局面での意思決定にとってそうである。曖昧さと厳格性にはサイクルがあり、それは芸術の歴史で繰り返されてきた。(cf. , *op.cit.* , pp.96-97.)

以上の考察で示されたのは、芸術に関係する企業政策の幾つかの局面である。直接的に重要でないのは、芸術家と芸術活動の支援者としての企業の役割である。人と支援される活動は死活的問題を持つだろうか、厳格さの高低の極端さは芸術の生死に関係するだろうか、といった問題は熟考する価値がある。これらが引き出された問題である。(cf. , *op.cit.* , p.97.)

(8) 感覚と芸術

イールズが芸術と企業の間を論ずるために展開している芸術論において特に重視しているのは、ランガー(S. K. Langer)⁽⁴⁾の「感覚(feeling)」論である。ランガーは、「感覚の客観的表現としての芸術」について説明している。感覚は情緒と同一視できないので、特殊な注意が必要である。極めて包

括的言葉だが、極めて厳格な心理学的分析に結びつけられている。彼女は、「芸術の導入は、情緒的激変の発生ではなく、『感覚の構想』というアイデアを表現する芸術家の表明である(*op.cit.* , p.97.)。」と説明する。

イールズはこの見解に対して、「ランガーが意味するのは、情緒と同様に、感性を含む感じられるあらゆるもの(*op.cit.* , p.98.)」と解釈する。彼女はあらゆるものをそれらの「感覚」で表すのである。「感覚」はこのように広く定義され、芸術家の仕事は投影された感覚の一つを客観的に取り扱うことである。ルネッサンスの芸術家達は、世界について感覚の新しい道を生み出す新しい知覚を創造したのである。これは人間の情緒が新しい世界に回された革命であった、と評価する。では、このような芸術論は、企業に対してどんな影響を及ぼすのだろうか。(cf. , *op.cit.* , pp.98-99.)

調査によって二つの方向が示されている。まず、芸術家の内部世界への外部世界の影響の問題がある。これは企業という外部世界の一つが芸術家に及ぼす影響である。芸術家の「感覚」の再現を通して外部世界への芸術家の影響の問題がある。芸術の有益な効果を極大化するためにどのように企業は貢献できるのか。これは教育と結びつき、市民の教育過程に対して、将来の企業の意思決定に責任ある人にとって、感覚の芸術家の知識を引き受けるために何がなされるべきか、が問われる。(cf. , *op.cit.* , pp.99-100.)

(9) イールズの評価

イールズはここで重要な見解を表明する。芸術のビジネスに対する重要性について企業指導者達に新たな自覚があるとしても、芸術を特別な短期的な企業目的の手段として、応用された芸術、芸術の利用の問題とする傾向がある。これに対してイールズは表明する。芸術家をビジネス目的のために彼等の特殊な創造性を利用するための長い道のりをまさに認め、目的をさらに深く調べなければならない。芸術の社会的機能は、企業のリーダーシップと同様に研究されなければならない。ランガーのこれらの機能についての陳述は

提案的である，とイールズは評価する。これらは重要な社会的変化である。そこから生ずる緊張の心理学的効果は，反対方向に向かう二つの異なる種類を含んでいる。その一つは「騎士の反応」と呼ばれる表面的不真面目であり，二つ目は「知的反応」である。即時に有用な物を追求する芸術は簡単に受け入れられ吸収され，新しい文化，情緒的発達と技術の一致を結果的にもたらし我々を助ける。これらは，我々に美しい形態の創造と認識を勇気づけ，「意識の墮落」を止めさせる努力ができる。(cf. , *op.cit.* , pp.100-102.)

ランガーの芸術の機能の問題に対する高く洗練化されたアプローチは，デザインの社会的応用についての関心の増大を明らかにした。彼女の芸術の基準は，見る人が直接的に受け入れる「感覚」の客観的な表明である。真の芸術家によって生み出されたイメージは，我々全てに大きな影響を持つ，と彼女は強調する。(cf. , *op.cit.* , pp.102-103.)

以上が，ランガーの「感覚」論の概要とイールズの評価のあらましである。

注

- (1) ホワイトヘッドについてイールズの見解の要約については，*op.cit.* , p.310を参照のこと。なお，以下の文献も参照されたい。

Alfred North Whitehead, *Science and the Modern World*, The Macmillan Company, New York 1925.

- (2) マリテイン(J. Maritain)については，*op.cit.* , p.310を参照のこと。なお，以下の文献も参照されたい。

Jacques Maritain, *Creative Intuition in Art and Poetry*, Meridian Books, New York 1955.

- (3) Cf. , Ernst Kris, *Psychoanalytic Explorations in Art*, International Universities Press 1952.

- (4) Cf. ,Susanne K. Langer, "The Social Influence of Design " *University*(Princeton)1965.

5 . 企業 - 芸術関連の倫理的側面

イールズは、芸術はそれ自身、倫理(ethics)的あるいは道徳(moral)的側面を持っていると考えている。とすれば、芸術は企業行動に対して何らかの倫理的・道徳的影響を与えることが予想される。そこで、われわれは彼が主張する芸術の倫理的側面について理解する必要がある⁽¹⁾。

1 . 行動様式(code)の創造

(1) 企業の行動様式

イールズはバーナード(C. I. Barnard)によりながら、他人に道徳的行動様式(code of morals)を創造する機能は、経営者の最高の責任である⁽²⁾、と主張する。「他の人に道徳的行動様式を創造する義務は、疑いもなく経営者責任の顕著な印である(*op.cit.* , p.117.)」。組織において、人々が行動様式の対立に直面するのは避けられないに違いないから、対立を回避する唯一の道は、具体的に正しい活動を見つけることであり、経営者には他人に道徳を作り出す能力が必要となる。経営者責任は、企業 - 芸術関連における両者の協働にとって重要であり、新しい行動様式は企業美学の行動様式をさらに複雑にするが、巨大企業のリーダーはそのような行動様式を創造する課題を持っているのである。「現代の企業経営者は、ルネッサンスのパトロンが持っていたよりも、美的活動を尊敬して、より困難な美的宿題を持っている(*op.cit.* , p.116.)」。(cf. , *op.cit.* , pp.115-117.)

現代企業の経営的責任は、内容において困難でありはるかに複雑である。組織内の行動様式だけでなく、組織外にも生得的行動様式が存在する。外部との関係は、企業の収益性と存続に中心的な意義を持ち、それらの象徴化の一つが芸術と企業との新しい関係であると、イールズは解する。そして、企業 - 芸術関係に二つの責任関係を挙げている。それらは、行動様式の数と複雑性から一般的に生ずる問題、ビジネスと芸術の相互作用において生ず

る特殊な問題である。は倫理と美学という古い問題を含むが、その考察の前に、企業 - 芸術関係のための行動様式を創造するどのような経営者の必要性があるのか、という根本的問題についてイーブルズは考察する。(cf. , *op. cit.* , p.117.)

(2) 道徳的行動様式の創造

イーブルズによれば、今日、企業のリーダーは、企業目的の分かりやすい説明を探索するために、外部の社会的、政治的、経済的規範と内部の協働的努力に影響を及ぼす過程を、注意深く観察しなければならないことを強調する。その例として説明しているのが、教育的過程と科学である。教育の効果は、新しい行動様式の企業行動対教育制度と教育共同体を、一般的に創造することであらねばならない。それは、リベラル・アーツの科目に関わる行動様式である。教育過程への企業の関心は、従業員の採用、製品とサービスの開発、企業資本主義システムの大衆の受け入れに影響する。教育目的と教育過程の効率性は、企業の運命の方向に直接影響すると認められる。科学的共同体と企業との関係は、新しい行動様式を創造するために経営者の責任が必要である。純粋科学と応用科学による新しい知識の有益さは、教育過程より大きい。企業はそのための行動様式を創造しなければならない。新しい行動様式の創造は経営者の職能である。この新しい目的とは、教育効果は、新しい企業行動様式に対応する教育制度と教育共同体を創造することでなければならない、ということである。それは企業の財務的支援に限定されない行動様式であり、美的目的をも含めて経営者職能を複雑にする。(cf. , *op. cit.* , pp.117-119.)

また、科学と企業との関係は、新しい行動様式を創造するために、経営者の責任を要求する。科学による知識の有利さは、教育過程より大きいから、科学に接近する新しい行動様式を創造しなければならない。企業の新しい目的の創造は経営者の必要な機能なのである。経営者責任は変化する行動様式を認めることを意味する。行動様式の対立を解決するには、バーナードの言

う道徳的創造性⁽³⁾を含めて、一般的目的の創造が必要である。道徳的創造性の機能は、美学のような現実的領域が追加されると、特に困難になる。(cf., *op.cit.*, 117-119.) しかし、われわれは、イールズが述べるように、行動様式の創造は企業にとって重要な課題と理解せざるを得ないのである。

(3) 企業の美的様式の創造

経営者は、対立する命令に遭遇したならば、確立された行動様式を脅かさず許される方向に政策を位置づけ、古い行動様式を強化するように新しい活動を望むだろう。教育の企業支援に特化している新しい行動様式は、確立された企業目的を建設的に実行する、企業の第三の範疇によって発展させられた。この企業では、企業権力の法律を修正する努力がなされ、目的は、一般的目標と企業実体の権力を、教育部門を判断問題として強化するよう再建することであった。幾つかの教育過程では、今や企業の美的活動が現れた行動様式に起きている。それらは抵抗を受け、企業 - 芸術活動の相互作用では企業活動は少しもないだろう。結果として、この領域の企業政策は様々な不都合を生じせしめ、政策は避けられなくなる。芸術家と共同体でも情緒的に良い措置が行われるであろう。他の企業では、伝統的な行動様式が破られ、管理の信頼性が失われ原因が追及され、その促進者をなだめる用意がなされるであろう。企業の指導者集団では、経営者は確立した行動様式を破壊せず、建設的努力によって未発見の新しい道を見つけるであろう。(cf., *op.cit.*, 119-120.)

提案された新しい企業行動様式的命令は、責任が小さく限られた責任しか持たない経営的指導者を必要としない。提案された新しい行動様式が複雑な道徳性をさらに高めるものならば、彼等の反応は彼等の気性の尺度である。新しい行動様式は特殊なストレスを一般化する。彼等は、技術的側面では経営的知識を要求し、外部的関係では、特殊化されたスタッフを持つ新しい組織的要因を要求する。この原則は、新しい美的企業行動様式の場合には特別

な力で適応される。新しい行動様式は、一方では、沢山の厄介な問題を招き、幾つかは妥当でないと企業に拒否され、他方では企業政策の問題として先頭に立たされる。基本的問題は芸術の道徳的側面を含み、芸術家と美学者によって否定されるが、企業の正直さは、その美的次元を持つと言うことが議論される。企業は少なくとも美の標準を神の標準に固執しなければならず、芸術における美の国家的理由を促進する、ということが期待される。新しい企業制度は社会的過程に結びつけられているので、国家目標からストレスを受ける芸術家の価値は企業目的に現れる。我々の社会は新しい価値に到達したので、美的企業行動様式の道徳的側面に注意深く注目することが社会的に必要なである。(cf. , *op.cit.* , pp.120-121.)

以上が、企業と芸術における行動様式の創造に関するイールズの見解の概要である。

2. 行動様式の倫理的側面

(1) 芸術と倫理

ここで、別の問題が起きる。美は芸術の目的か、あるいは他の目的か、という困難な問題が。今日、新しい企業制度は社会過程に密接に結びつけられているので、国家目標からストレスを受ける芸術家の価値は企業目的に現れる。我々の社会は、芸術の価値を含んで新しい価値に到達し、それは国家的道徳目的の次元を持つ。文化的時代では、美的な企業行動様式の道徳的側面へ注意深く注目することが社会的に必要なのである。芸術とエロス(eros)は、企業の経営者が理解のために議論した世界において連合している。芸術の倫理的機能は価値があり、芸術は我々を助けてくれる。芸術は、「二つの文化」に架橋するため呼び出され、単なる芸術愛好家としてではなく、問題を解決するために経営者は芸術と向き合い芸術は経営者を訪ねる。(cf. , *op.cit.* , p.121.)

周知のように、フロイトはエロスに真っ正面から取り組んだ精神分析の創

設者である。彼は常に「内部的エロス」に注目し、それはタナトス(Thanatos)⁽⁴⁾との心理的葛藤を引き起こす非道徳的敵であり、それが多くの精神的症状を引き起こすことを明らかにした。イールズはエロスを人種滅亡の道に進ませる可能性に言及し、この問題に取り組んだ。しかし、我々は内部のエロスを人々に気づかせることができるだろうか？彼は解決の鍵を探すために、芸術は何らかの答えを持っているだろうと判断し、フロイトの基本的問題の前に立ったのである。(cf. , *op.cit.* , pp.122-123.)

芸術家の感受性は我々に有用であるが、時代の心配事の美的言明は論理主義者を満足させないであろう。しかし、彼等是我々のジレンマの理解に何かをもたらす。芸術は知識への道であり、科学を結びつける。それは道徳の真実に接近できる道でもあるだろうか？倫理と美学との関係は、芸術は道徳的次元を持っているという主張に暗示されている。偉大な企業は、偉大な芸術家のように好まれる成果のための研究に携わるべきである。答えを究明するために、芸術と企業に何らかの幾つかの次元を持つ同盟をもたらす。企業は、科学的真実の追求と教育的制度による知識の普及で既に含まれているが、芸術の倫理的関係に企業を巻き込むことは、この構想を超えた一歩である。(cf. , *op.cit.* , p.123.)

我々は、企業政策者が増大する切迫性を持って直面している問題、企業生態の問題を考えなければならない。資源は無限であるとして長く怠けてきた自然環境に、危険が潜んでいる。怠った生態的目標から来る人間活動は、企業の生存と繁栄はない、という恐れを警告している。しかし、同時に人々と文化には、強い生命力と人間の創造性があり、我々は洞察によって迷路の脱出を発見するだろう。したがって、芸術家の洞察は科学者の味方として、重要になるだろう。ここに、企業制度における創造的衝動が芸術家の創造性と結びつける事ができる。新しい同盟の興味ある事実は、芸術家と科学者の能力が次第に勇気づけられる研究室、スタジオ、ワークショップで見られる。(cf. , *op.cit.* , p.123-124.)

(2) 企業と芸術の倫理

タナトスの脅威に対抗して、挑戦的でエロスの生命を与え生活をより良くする力がある。ビジネス制度は、この生命力を主張するために呼びかけられる。新しい命令が、生産性と収益性を飛び超えて行く。それは新しい価値への信用であり、これらの新しい価値の間で、企業政策にはっきりと現れるのは、倫理的目的と密接に結びつけられた美的目標である。だが、芸術と道徳の混合の危険は明かである。思想的美的論争、思想的純粋さに強制される芸術は、芸術的で知的な主張の様式に静められた負荷より恐ろしい。しかし、両者において、負荷は創造的精神に必死の効果を持つことができ、高い文化的発展を遂げた古代ギリシャのように、いつも市民化を気高くするだろう。他方で、公的芸術はいつも光輝であるとは限らない。組織化された標準は美的創造性のためにいつも役立つとは限らず、有害になることもあり得る。組織が芸術を冷やすことは、芸術の倫理的機能問題の追及が我々にとって基本的問題であることを教える。(cf. , *op.cit.* , p.124-125.)

それでは、イールズは芸術と倫理についてどのような見解を持っているであろうか。

3. 芸術と倫理

(1) 芸術の倫理的機能

企業政策の観点からすれば、芸術の倫理的機能は知ることの方法としての芸術の側面より重要である、と彼は主張する。そして、東洋の芸術と西洋の芸術の持つ倫理的機能について比較・対照し、芸術の倫理的機能は、他の文化と過去から描かれて、現代的で永久の妥当性を持つ、と結論づける。ランガーの言葉を参照して、芸術は、道徳的価値に加えて生態的な重要性を持つ、と述べる。シンボル化され客観化された「感覚」は、成熟し自覚する市民化では必要なものなのである。自覚は科学と論理のみでは不可能であり、企業の美的行動様式は企業政策の重要な局面として取り扱われると言う観点か

ら、自覚は特別なものなのである。(cf. , *op.cit.* , pp.125-128.)

(2) 芸術と企業倫理

企業の規範は、時々外部によって決められているが、自己発生的でもあり、これは企業の美的行動様式に応用される。「あらゆる価値論的問題のように、美的価値の問題は極めて哲学的な複雑性の一つである(*op.cit.* , p.128.)」。主要問題の一つは、倫理的価値と美的価値が排他的であるかどうか、それらはどのように相互関係しているかどうか、である。美的規範は決定的な多くのものに対立するであろう、同時に我々は芸術に依存しているように見える、とイールズは考える。そこで、芸術家は公然として非難されるが、それは創造的精神のために特徴的である。芸術と道徳のこの衝突は、企業が偉大で識別がない芸術を育成することが期待できないことが考えられる。しかし、企業者職能におけるシュンペーター(J. A. Schumpeter)の見方を思い起こしてみよう。彼は、革新を、すなわち創造的破壊の過程を資本主義における基本的事実を明らかにしたのである。そこで、イールズは、芸術家と企業者の創造的過程は、興味ある平行関係にあると主張するのである。(cf. , *op.cit.* , p.128-129.)

(3) 芸術と機械化

芸術の道徳性に対して沢山の批判があるが、危険なのは芸術の倫理的価値が不十分にしか認められないことである。問題は人間に対する作用である。それは企業政策においても真実である。高度な科学と技術の時代では、芸術は過小評価されがちである。芸術を「生活の木」と捉え、科学を「死の木」と捉えることは良いことかもしれない、あるいは経済学と芸術は変わった物であると強調することも。偉大な社会であることに文句を言う社会では、芸術は無視されるという不平が集まる。

しかし、もっと大きな不平がある。それは、我々の産業時代の支配的用具

としての現代企業への直接的指摘である。特に「機械化」(mechanization)という非人情に対する批判である。芸術に対する現代的運動の方向を後悔する芸術家も無視できない。芸術を含む文化自体の終焉としての機械化と産業的能率の否認に対して、暗黙の規範がある。多くの芸術家は、機械化は世界の合理的見解の最終産物である、という宣言にまだ同調する。また、別の芸術家は、我々の人間的に空虚な、世界の方向がなく意味がない運動に対抗する唯一の安全策である、我々の道を見つけないといけない、と主張する。彼は、「自動化」(automation)は仕事の喜びから我々を解放し、コンピューターは心の合理的機能を取り去る、と述べた。(cf. , *op.cit.* , pp.130-132.)

(4) 芸術論争と企業行動

芸術については、今まで多くの論争があった。芸術の道徳的役割、人間性と現代科学の対立と現代企業の関わり。企業と芸術の相互作用の一部は、二つの文化の主張に対するアンチテーゼである。科学と技術の発展の影響、不可能として放棄された目標の再設定。これらの目標に対する連邦と州の役割、企業への理想主義者による目標の導入、など。

科学と伝統的文化という「二つの文化」は平凡になった。しかし、後退しない対立と持続、アカデミックな論争への影響、より深まる対立、溝を除去する努力、教育の重要性、三つの文化の崩壊、「自然のラダイト運動」と産業革命への反対、新しい教育戦略の要求、など。「二つの文化」問題を超える大きな動きは、企業問題の世界ではほとんど反響はなかった。しかし、万が一の影響は感じられた。科学を攻撃する輩は、企業を同列に見なす。リベラル・アーツ大学への支援は、大抵のビジネスマンにとってショッキングであった。反対にゆっくりと芸術を支援する企業もあった。(cf. , *op.cit.* , pp.132-136.)

これらの美的論争の流れと逆流は、企業指導者に対してその企業政策に係る。企業は反人間的運動を持つ大衆心と同列にされたくないであろう。

ビジネスの観点から、感覚を作る企業の美的行動様式によって先手を打つことができる。この行動様式はほとんどの大衆が触れないアカデミックな論争に過ぎない、と考えるのは危険である。企業資本主義のマイナスの反応は、必ずしも芸術と理想に帰せしめられないから、企業の美的行動様式は、公衆関係よりもより粉塗するに違いない。行動様式は企業活動でバックアップされるべきである。問題なのはどんな種類の活動か、である。(cf. , *op.cit.* , p.136.)

(5) 芸術と企業

企業の美的活動にとって有用な方法は、唯一の方法ではないが、美的行動様式の教育政策の基礎の上で美的政策に乗りながら、家族的地盤から非家族的地盤に移ることである。芸術の教育的側面は最も尊敬し得る兆しを持ち、教育の用具としての芸術と文化の制度と企業との結びつきは、沢山の地域社会で既に作られている。「教育への企業の財務的支援は最近最も魅力に満ちており、最も重要ではないとしても、教育へ長年取り組んでいる企業の関心の宝石である (*op.cit.* , p.137.)」。しかし、教育者としての企業は変化し、企業教育学の美的側面にその関心が移動してきた。

企業と外部との関係が発展し、我々は今や企業の社会的責任の構想が変化する段階に到達している、とイールズは判断する。その機動力として、彼は二つの要因を挙げる。教育と芸術である。教育においては必要な人材の不足と教育訓練の不十分性である。リベラル・アーツの教育は、成功の候補者に必要である。教育での芸術には、意識的で体系的な関心を企業に駆り立てる。教育の財務的支援は苦悩する教育制度を助ける緊急的手段として始まったが、企業政策の発展過程において、経営者は哲学的深さに到達する支援の合理化を成した。結果として、それはより知的で美的な積極的行政をもたらした。(cf. , *op.cit.* , pp.137-138.)

企業従業員の教育と教育制度との企業の有機的関係を徐々に確立すること

は、企業倫理における興奮の要素である。それは芸術家との交流を鼓舞するだけでなく、「道徳性の対立」を創造的に対応する可能性をひらく。「結局、教育は基本的に、プラトン(Plato)が実現して以来全ての教育と倫理の偉大な哲学者のように、道徳の追求である(*op.cit.*, p.138.)」。「内部的であれ外部的であれ、教授学的活動に対する企業の社会的責任は、必然的に芸術を含む(*op.cit.*, p.138.)」。既述のように、知ることの方法として、芸術はいかに基本的であるかが示されたが、今や企業は、教育的政策の発展と実行において、芸術を活発に導入する責任がある。(cf., *op.cit.*, p.138.)

真実志向の意味での真実を知る方法としての芸術の価値に、倫理の意味でのさらなる真実の価値がうまく追加される。企業政策は、両者の地盤での教育プログラムに芸術を含むことができる。芸術の道徳的価値は、常に問題を阻むことができる。企業にとって、マイナスの側面には注意が必要である。プラスの側面には何らかの合図がなされる。美しいかそうでないかは芸術における価値理論の中心であり、反啓蒙主義から我々を解放し、何らかの美的価値がある。このように芸術を単なる有用性から眺め、倫理的目的からしか芸術が教育に必要性である、という安易な結論を導くならば、我々は少なくとも芸術の目的の道徳的な狭い見解を回避できるだろう。そのような芸術の理解は、その目的を浅くし従来の目的を否定するが、芸術は「治療機能」(curativ function)を持つという見解を見逃してはならない。同時に芸術は冒険心を鼓舞し社会に奉仕することを忘れてはならないだろう。(cf., *op.cit.*, p.139.)

イールズは、企業政策に関連する芸術の倫理的側面について、建築家の例を取り上げて説明する。その重要性について建築家の問題を超越するのは極めて困難だからである。多くの建築家や哲学者などの論争を紹介しながら、建築の芸術的問題を示唆している。検討の結果として、彼は断言する。建築は美的選択と同じ倫理的選択をすることである、と。したがって、現代的企業はこれらの倫理的選択を回避することはできないし、企業のリーダーシップ

は道徳性の対立を含むのである。結局、企業は公的政策を含まなければならず、それら全てをすることはできないが、正しい公共政策を勇気づけ正しい教育プログラムを支援することはできる、と彼は総括する。(cf. , *op.cit.* , pp.139-142.)

4．芸術の倫理と企業

イールズは、上述の検討の結果として、以下のような結論を示している。

芸術における美的問題の倫理的次元は明瞭ではないが、同じようなテーマはあらゆる芸術の全てに見られる。企業の政策と芸術との関係において、倫理の行動様式を知らせる糸口を探することは、企業経営者にとって極めて重要なテーマであり、外部の利害との関係においてもそうである。芸術の倫理的局面を評価するとき、ほんのわずかな議論に限定されるのは危険である。これは、芸術の特殊化された部門での経験では青写真を描けない企業 - 芸術関連の学生にとって特に重要である。あるいは、企業の美の様式にアプローチする時、極端な二つの立場のどれかを取ることは安全でない。第一に、芸術は良いことを有利にしなければならぬとすれば、それは良い芸術ではない。第二に、芸術と道徳は全く異なるので、芸術家は道徳的目的を持たないし、良い芸術家であるならば持つことができない。企業の政策策定者から見ると、芸術を支援するプログラムは、少なくとも企業に間接的な利益をもたらす問題があり、これは倫理的企業の問題である。我々の時代では、企業の目的は排他性が少なく、「物質的」であるより「理想主義的」であり、企業の美的目的は後者の範疇に属する、とよく言われる。最後にイールズは自問する。企業はそれぞれに異なっており、芸術に反対さえすると仮定しなければならないのであろうか？、芸術への興味はビジネス目的を弱めると認めなければならないのだろうか？、探索は少なすぎたのでここで補充しないのか？、それらは芸術家とビジネスマンの両者にとって大きな不利ではないのか？、と。(cf. , *op.cit.* , pp142-143.)

注

- (1) イールズは、「道徳」(moral)と「倫理」(ethics)とを区別せず、同じ意味で用いている。
- (2) Cf. , Chester I. Barnard, *The Function of Executive*, Harvard University Press 1971 . p. 272.
- (3) Cf. , Barnard, *op.cit.* , Ch. .
- (4) タナトスとは、本来はギリシャ神話における擬人化された死を意味しているが、精神分析学では「死の本能」を表す言葉である。

6 . 結

以上のように、イールズは、企業と芸術との関連を多方面から検討している。その際、芸術と企業にとって基本的に重要なのは「自由」、すなわち「創造性し革新する」自由である。この自由は、企業と芸術にとって共通する死活問題である。しかし、われわれの社会には完全な自由はあり得ない。特に社会的制度としての企業と芸術については、社会的、政治的、倫理的拘束がある。特に政治体制は過去のあるいは現在の世界においては、芸術の自由にとって特に重要である。幸いアメリカは「民主的立憲制」という、重要な自由を保障する政治体制にある。アメリカにおける企業と芸術の発展は、連邦憲法が保証するこれらの自由を負うところが大きいと言っても過言ではないだろう。

しかし、自由の保証は企業と芸術に新たな課題を突きつける。企業では最適な意思決定とその実現であり、芸術では自由な表現に必要な財務的支援である。企業は芸術から新しい知識を獲得し、芸術は企業から支援を受ける。ここに両者は自由を得るといふ共通する目的を持つことになる。しかし、問題はパトロン制には公的であれ私的であれ、パトロンによる芸術への介入と資源の不足という欠陥があることである。われわれの社会は、芸術の社会的意義について十分な理解を持って臨まなければならないであろう。

自由の意義についてはいまさら説明する必要はないと思われるし、もし必要であるとしたら社会的・政治的な大問題であろう。しかし、自由についての教育はわれわれの社会でも必要であろう。われわれの社会が発展したのは、シュンペーターの所論を持ち出すまでもなく、創造と革新の自由が存在したからである、と言っても誤りではないであろう。ここに、企業者と芸術家に共通する自由についてその意義を認識する必要性が生まれる。すなわち、教育の問題が現れるのである。われわれは、芸術を重視した適切な教育システム、すなわちリベラル・アーツ教育のシステムを構築しなければならない。それは、芸術家や企業者を排出するから、企業と芸術の義務でもある。

芸術と企業はこのような共通の目的があると同時に、両者を切り離せない相互依存関係がある。芸術は科学と同じく、企業にとって「知るための手段」である。この点に関して、イールズは論争の余地はない、と断言している。もちろん、科学も企業にとって必要な知識を創造し提供する手段である。芸術が科学と異なるのは、芸術は全体として人間理解の方法であり、真実の理解の方法である、とすることである。したがって、企業は、芸術を支える責任があると言わねばならない。

芸術を正しく理解するのは困難である。また、芸術は倫理的側面を持っている。しかし、われわれは知識のまた真実の宝庫としての芸術を理解しなければならないであろう。この努力は、人間社会の発展と人間自身の心の豊かさを深めるであろう。企業は芸術との相互関係の中で芸術を求め応用し、芸術は企業政策的意思決定に必要な創造性と革新の精神を提供するのである。

